

ミシエル・パストウロー著
平野隆文訳

『熊の歴史』

——〈百獣の王〉にみる西洋精神史——

筑摩書房 二〇一四・三刊

A5 四〇八頁 四七〇〇円

紋章や印璽の歴史学を構築、近年では色の歴史学の開拓に力を入れていくパストウローは、象徴史の観点から長い間動物にも関心を抱いてきた。その中でとりわけ熊について歴史的・包括的に語ることを試みたのが二〇〇七年出版の本書で、この度待望の邦訳が上梓された。ライオン以前に王位に君臨した熊は、一二・一三世紀を通じてその座から引き降り降ろされる。本書は、その変化の時期を中心としながらも、旧石器時代から近現代までを幅広く扱っている。紋章をはじめ数多くの図像を用いつつ、神話、歴史書、聖人伝から騎士道物語等の文学作品まで縦横無尽に駆け巡りながら、人間の目から見た「熊の歴史」を紡いで見せる驚異的な歴史書である。

本書は大きく分けて三部から成る。畏敬された熊（旧石器時代から封建時代まで）、闘いを挑まれた熊（シャルルマーニュからサン・ルイまで）、王位を剥奪された熊（中世末から現代まで）である。

第一部では戦士や君主と肩を並べる熊が描かれる。年代記や武

勲詩、騎士道物語において、熊に立ち向かい撃破した者が称えられる事例は枚挙に暇がない。さらに、格闘の前後に熊の力を身に帯びるために、その血を飲み肉を食らったり、唸り声や歩き方を真似したりする戦士もいた。そのように模倣する価値のある立派な存在だったのだ。

一方、第一部の熊は聖人に手なずけられる存在として描かれる。相変わらず獰猛な様子で登場したとしても、聖人の言葉によって説き伏せられてしまい、手伝いを始めるのだ。また、熊を模する行為は罪深い変装として、公会議や神学者の著作で糾弾された。さらに、熊を畏敬される地位から降ろすべく、悪魔と重ね合わせて語るトポスも出てくる。こうして熊は「一二世紀から一三世紀に差し掛かる転換点の頃には、その座を完全に手放さざるを得なくなった」。さらに「紋章の動物誌」と銘打つ項の展開により、図像や絵画作品を通じて、王者の座が熊からライオンへ移行する様子をより生き生きと知ることができるだろう。

第三部で熊はついに、七つの大罪のうちの五つと結びつけられ、悪しきイメージを有する動物として侮辱されるまでに至る。魔女のサバトでサタン的な役割を担う場合さえあった。しかし貶められたばかりではない。一四世紀には、熊を倒して名を上げたものの、毎晩その戦いを再現するが如く虚空に剣を振るう守備隊長がいるし、一七世紀には美貌ゆえ熊にさらわれ性的関係を強要された後、熊と洞窟で長く暮らした娘がいると言う。熊の歴史学は単線的ではない。だがそれは他の多くの歴史学もまた同様ではないか。「転換点」を仔細に検討する歴史学者としての緻密さと、可能

な限りの史料を総動員して、語り難い象徴世界に現実的な厚みを持たせながら、巧みに話題を繋いでゆく表現者としての能力が十分に発揮された本書は、分野の枠を越えて多くの研究者を楽しませ、己の研究の意義をも考えさせてくれる一冊であろう。

(後藤里菜)